



時代を拓き 世界に貢献する人を目指して

Global View

2019年11月22日 Newsletter 第63号 仙台白百合学園中学・高等学校 国際教育部

「ローマ教皇の来日に向けて」

渡辺 顕一郎（宗教科・社会科）

いよいよ明日、ローマ教皇フランシスコが来日する。教皇の来日は38年ぶりということもあり、現在、国内のカトリック教会、ミッションスクール等の関係各所では歓迎の準備に熱を入れている。

そこで、今回の教皇様の来日にあたり、この紙面では、15年前、私が初めて教皇ミサに与った時のことを振り返りたいと思う。当時、大学生だった私は、洗礼を受けてはいたものの、遊びやアルバイトに夢中になるあまり、ミサに与ることに価値を見出せず、しばらく教会からは足が遠ざかっていた。そんな状態を見かねた母からある時、「今度、ドイツのケルンでワールドユースデーというイベントがあるから行ってみたらどう？」と声をかけられたのがきっかけだった。（ちなみに、ワールドユースデーとは、前教皇ヨハネ・パウロ2世によってはじめられたもので、3年に1回、世界中の青年有志が1箇所に集い、親交と信仰を深めながら教皇様の話に耳を傾け、祈りを捧げる巡礼の旅である。）単純に海外に行っているいろいろな人たちと交流してみたいという想いがあったので、母からの誘いに対して2つ返事でOKしたのだが、行くと決めた後がかなり大変だったのが今でも思い出される。

この巡礼の旅では、「わたしたちは、イエスを拝みにきたのです。（マタイによる福音書2章2節）」というテーマが設定されており、東方の三博士が星に導かれて、立ちふさがる障壁を乗り越えながら遠路はるばる幼子イエスを拝みにきたように、私たちもその姿にならい、日本を出発しドイツ近郊の土地を巡りながらケルン（ケルン大聖堂には東方の三人の博士のお墓がある）のメイン会場にたどり着くようなプログラムになっていた。そのため、まず、ドイツの近隣の国であるルクセンブルクに3泊ほどホームステイをしたのだが、このホームステイは人生でベスト5に入るくらい自分の中の大きな障壁だった。なぜかというと、私自身ホームステイがはじめてだったこと、そして、私は致命的に英語が話せないからだ。どのくらい話せないかというと、自慢ではないが、当時は、“Hello”と“Nice to meet you” “I’m fine” “Thank you” “I think so”といった5つの言葉ぐらいしか使いこなせなかったので、ホストファミリーや現地の人々と会話するときにもこの5語を乱発+ボディラングージでコミュニケーションを図るしかなかった。「のどが渴きました」、「おなかが痛いです」「夜ご飯はなんですか」といったやりとりをするのにも相当苦労した思い出がよみがえってくる。しかし、ホストファミリーや現地の人々はこんな語学力のない私も温かく迎え入れて、地元の教会や観光名所などに連れて行ってくださったり、ルクセンブルクの文化や歴史、風習を手取り足取りわかりやすく教えてくださったりしたのだった。周りの温かい協力のもとホームステイ(自分の中の障壁)を終えた後、いよいよ教皇ミサに与かるためにドイツに移動したのだが、ドイツでは、まず日本の司教様方が教皇ミサに与かる前のカテケージス(教会の教えの解説)を何回か行い、今回の巡礼の旅の意義を全体に確認し、参加者の巡礼意識を啓発してくれた。その後、ミサが実施される会場に移動したのだが、会場内の敷地はただ広くメイン会場まで約10キロ近く歩かねばならず、道中、日本人の仲間たちと「なぜ、この巡礼の旅に参加したのか」、「自らの信仰の履歴」、「この巡

礼の後、何をしたいのか」等について熱く語りながら、時折、ロザリオを握りしめ、祈りを唱えながら歩いたのを覚えている。今思えばこの歩きながらの時間は自らの生き方、信仰について振り返ることができるよい時間だったのではないかと考えている。その後メイン会場にたどり着いたのだが、会場には世界中から集まった 100 万人近くの若者（日本からは全国から約 300 人の若者が参加した。ちなみに参加者の中にはまだ 10 代だった若さあふれる平岡先生もいました。）が集い、会場内は若者特有の熱気と活気にあふれており、祈りと聖歌に包まれる中、教皇ミサがはじまった。前教皇であるベネディクト 16 世は「東方の三博士の巡礼」の話の軸にしながら、世界中の若者がこの場に集えていることに感謝を捧げつつ、三人の博士がイエスにあって人生が変わったように、私たちも巡礼をしにきたからには、生き方を変えていかねばならない。自己中心の生き方を捨て、どのように生きていけばいいのかということを実験的に考えなさい、そして社会の中で苦しんでいる人々、嘆き苦しんでいる人々の声に耳を傾け、若い力をその人たちのために使いなさいというお話をしてくれたように覚えている。その後、巡礼の旅を終え帰国した私は、三人の博士のように生き方ががらりと変わったというわけではないが、教皇ミサがきっかけとなって不思議と薄れていた信仰を回復し、以前よりも自分の生き方に対して向き合えるようになったように思える。この巡礼の旅は私の中で大きな転機となった出来事だった。

今回の教皇フランシスコの訪日に関しても、私たちは教皇がただ訪日したという事実だけを淡々と受け止めるだけでなく、教皇様から発せられる一言一言に耳を傾け、自分を振り返りつつ、社会の中で求められていることは何か、自分にできることは何かということ深く考える機会にそして、感謝と祈りのうちに与えられた時間を過ごせればとよいと思っている。



ケルン大聖堂



日本の巡礼団



教皇ミサの前夜は野外泊